



Faculty Waseda University Graduate School of Asia-Pacific Studies (GSAPS)

2021/2022
VOL. 3 | Spotlights



GSAPS Faculty = Expertise × Humanism

早稲田大学大学院アジア太平洋研究科 (GSAPS) では
専門分野の第一線で活躍する研究者や
国連児童基金 (UNICEF)、世界銀行等の国際機関、
外交やマスメディアなどでの実務経験を持つ専門家など
高度な研究力と実践力を持つ、多様な
"Faculty (教授陣)" が教鞭をとっている

その唯一無二の "Expertise (専門性)" と
多彩なバックグラウンドで培われた豊かな
"Humanism (人間性)" を
共に持ちあわせた教員の声を通じて
GSAPS が掲げる 3 つの領域
「地域研究」「国際関係」「国際協力・政策研究」を
深く学ぶ魅力に迫る

File 01

Glenda S. ROBERTS

ロバーツ グレンダ S

専門分野：

社会・文化人類学、現代日本社会、外国人労働者の受け入れ対策、ジェンダーとワーク・ライフ・バランス

現代社会における人の営みを学び、 どう外国人を受け入れるかの視点も研究

GSAPSでは1998年から教鞭を執っています。同時に社会・文化人類学者として、「ワーク・ライフ・バランス」と「日本の移民受け入れ対策と問題」の研究もしています。「社会・文化人類学」は人類学の中の一つで、人と現代社会による営みを学ぶことが主でありながら、仕事や家族、介護など含め、社会がどのように変化しているのかを知ることや、働く世代が減ってきている高齢化社会の中で、日本がどのように外国人を受け入れるのか、という観点も学んでいます。

ものの見方は、人の数だけあることを学んだ高校生時代

マサチューセッツ州の高校に通っていた頃、「社会で起きていることのレポートを書く」という宿題が出ました。私はその時、今もアメリカに存在する「ブルーダーホフ」というドイツ出身の宗教団体に関する本を読みました。独自のコミュニティと文化を作って生計を立てているその人たちに惹かれ、父を説得して現地で一泊させてもらいました。このコミュニティでの生活は、私のそれまでの生活とは一切違い、ものの見方は無数にあることを知りました。この経験が社会・文化人類学を研究するきっかけの一つになったと思っています。

脈々と続く人の営みの歴史がもたらす影響を知り、 人の多様性を受け入れる

人類学は、人が人である以上、絶対に無くならない学問と言えます。30万年という長い期間に、人々の営みが地球にどのような影響を与えてきたのか、という広い視座での学びだからです。一方で、人類学を学ぶと、人の持つ多様性を受け入れられるようになります。卒業後どんな未来に進んだとしても、共にいる人たちの意見や、ものの見方に感謝しながら、一方的な判断や偏見を持つことのない、非常に幅広い視点を形成できると思います。

批判的な視点を持ちながら、 自ら結論を出していく素養はすべてに繋がる

私は必ずしも、私と同じように博士号まで取って大学で教鞭を執るべきとは全く思っていません。人類学はどの分野にも転用できる学問なので、修士号を取得した時点で、可能性は無限に広がります。人が書いた書物や文献に対して、批判的な視点（クリティカルシンキング）を持って、検証していくプロセスも重要です。また、ディスカッションに自ら参加して、その結論を導き出す素養は、人生すべてに有効であると言えます。お互いを認め合って、多様な視点を持ってほしいと思います。

File 02

Shinzo HAYASE

早瀬 晋三

専門分野：アジア民族史・社会史、国際関係史

欧米日の宗主国視点で書かれた資料を、 現地に住む人の目線で読み解く

「東南アジアの歴史」を専門に研究していて、授業では特に「海域世界の歴史や日本との関係」を教えています。海域世界では、人とモノが活発に動きます。陸域の定着農耕社会では、農業において耕す・植える・収穫するなど、季節に沿った一定のリズムがありますが、海域世界はかなり流動的で、人々が前例にとらわれずに臨機応変に対処しているため、文献が重視されずあまり残されていません。一方、東南アジアの多くの国や地域が欧米日の植民地支配下にはいったため、欧米日の宗主国の視点で書かれた資料が残っています。現地の人々の目線で、欧米日側が残した資料を読み直す必要があります。

文献には現れない、 精一杯強く生きた人たちのことを伝え、残したい

大学1年生の時、ユネスコの東アジア文化研究センターのフィリピン語講座に参加しました。学んだ知識で日本の新聞や雑誌を読むと、フィリピン語のカタカナ表記などに違和感を覚えました。そして、スペインやアメリカの影響を悪い意味で受けているフィリピン研究のことを知り、直接現地で学びたいと思ったのです。大学卒業後、西オーストラリアに渡り、東南アジアの海賊の歴史や、シンガポールの中国人・日本人売春婦などの存在を知り、文献になくとも、精一杯強く生きた人たちのことを民族史や社会史の研究の中で伝え、残したいと思ったのも研究を始めた動機です。

互いの歴史と文化を理解し、 尊重する価値観の重要性

まだ研究が発展していない分野で必要なのは、研究工具の作成です。資料を発掘して復刻し読み解くことに注力してきました。これまで、南方開発金庫の調査資料や、ボルネオ新聞、南洋協会発行雑誌などの復刻に努めてきました。また、今、国際交流の場でも本音で語ることが増えています。重要なのは、互いの歴史と文化を理解し、尊重することです。海域世界に属する東南アジアは、対人関係を重視し、相手が嫌がることを言わないなど、陸域世界と違った価値観を持っています。互いに違いを知り、対等に議論してほしいと思っています。

本を読むことで他者から学び、 自らの意見を持つほしい

人文学を専門とする学生は、週に1冊は本を読んでほしいです。毎週私は書評ブログを更新しています。読み放しではなかなか頭に残らないのですが、本の紹介と読後コメントを書くことで次の自分へとつながります。重要なのは他者から学ぶという姿勢です。本は、一部ではなく、全体を通じて何かを伝えようとしているので、著者の目線に立って学んでほしいと思います。そして吸収した後は、自分がどういう意見を持つのかを考えてほしいです。とにかく学生に伝えたいのは、いろいろな本を読み、本から学んでくださいということです。





経済発展を促進する政策をとる国と、とらない国の違いに着目する

「経済発展論」と「経済発展の政治経済学」という科目を教えています。これまで発展途上国がどのような条件が整えば経済発展するのか研究してきましたが、経済学の分野ではすでにその条件がかなり明らかになってきています。しかし、世界の国々には条件を整えるための政策をとらない政府が多くあり、経済発展できないでいます。一方で、日本や韓国といった東アジアの国々は条件を整えるための政策をとってきています。なぜ経済発展を促進する政策をとる国と、とらない国があるのかを政治経済学の視点から研究しています。

貧困を目の当たりにした海外で、経済発展に関心を持つ

大学1年生で初めて海外に行き、タイとミャンマーの国境近くに住む山岳民族のカレン族という部族のもとで10日間ほどホームステイしました。そこで電気もガスも水道もない原始的な生活に触れ、道中バンコクでは道端に多くいた物乞いの人たちの姿を見て、日本にはない貧困に直面しショックを受けました。大学2年生で、フィリピンのスラム街にもホームステイし、住んでいる人たちの非常に貧しい生活にも触れました。貧しさの理由と、日本との違いに疑問を持ったのが経済発展の研究へのきっかけです。

経済学と政治学を融合させ研究することの重要性

経済発展を実現するためには、インフラ整備や財産権の保護、経済的自由、人材育成、マクロ経済の安定性など様々な要素が関係します。こうした要素をみていくと、政府が重要な役割を果たしていることがわかります。つまり、どのような政策をとるのかを理解するためには、政治学との融合が必要です。政策の結果としての経済的な成果や結果が、政治現象にどうフィードバックされるかという経済と政治との相互作用について、政治学の研究者にはまだ十分に理解されていません。経済学と政治学の複合的な観点から、経済発展という現象を研究する必要があります。

発展途上国での貧困層の未来のために貢献できる人になってほしい

経済学は、かなり数学を使う科目ですが、様々な分野で勉強してきた学生が理解できるよう、数学的でテクニカルな部分は強調せず、実例を用いて、興味が湧くようなトピックを提供するよう心がけています。経済発展は、多くの発展途上国における貧困層の人たちが、貧困から抜け出すための非常に重要な条件です。卒業生には、経済発展の研究を続ける人も、国際機関で働く人もいます。経済発展のメカニズムをよく理解し、特に貧しい国々の経済発展に貢献できるような人材に育ってほしいと思っています。

File 03

Atsushi
KATO

加藤 篤史

専門分野：経済発展論、産業発展論、インド経済

欧米主導の国際金融システムの中、 アジア各国の発展を日々研究

GSAPSでは「グローバル経済と地域統合」、「国際資本移動とアジア金融統合」の講義を担当しています。専門分野は「国際マクロ経済学」で、特に国際資本移動が国家間の経済発展にどう影響を与えるのかを研究しています。私が学生だった25年前ごろからアジアの情勢が激変して、日本の立場も変わりました。特に中国の台頭と、世界経済の重心が東アジアに移っていく一方で、依然として国際金融システムは欧米主導です。欧米主導の国際金融システムの中で、アジア各国がどう発展するべきかを日々研究しています。

経済格差への興味、 アジア経済危機がもたらしたインパクト

学部生時代に経済格差に興味を持ち、その国特有の問題以上に、グローバル化が国家間の経済格差にどう影響を与えているのか知りたいと思いました。中でも、資本移動に関心がありました。ドイツ留学中に、ユーロ導入によるヨーロッパ経済への影響を勉強する最中、アジア経済危機が起こりました。留学を断念し、国に帰る知人を目の当たりにして、国際金融市場が、個人と国に与える影響について考えました。その後の研究教育活動を経て、国際政治経済や国際関係に、経済学の視点から貢献するべく、現在に至ります。

東アジアにいる当事者として、 東アジアの経済発展を考える

経済学はアメリカ主導で、アメリカの学会が突出して影響力を持っています。ヨーロッパでは市場統合を背景に、様々な国で研究分野の拠点ができ、各国の研究者や学生、教員の交流が盛んに行われています。一方、東アジアでは、そのような交流はまだ限定的です。東アジアの経済発展を考える時に、「アメリカでこういう研究をしているから取り入れよう」ということではなく、東アジアにいる我々が当事者として、東アジアの視点から研究に取り組んでいくことが大事だと考えています。

アジアの金融市場の発展に 貢献できる人材を育成したい

世界トップレベルの国際学術誌に論文を投稿しながら、国際資本移動と東アジアの発展の分野では世界一と誇れる教育環境の拠点を、ここGSAPSで作っていきたいです。また、アジアの問題を考えるアジア発の人材の育成を目指し、国際機関から各国政府民間企業、NGO、シンクタンク、それぞれの分野と立場でアジアの発展に貢献できるリーダーを育成したいと考えています。同時に、学生と一緒に、アジアの金融市場の発展にインパクトを与えるような研究にも取り組んでいきます。

File 04

TOMOO
KIKUCHI

菊地 朋生

専門分野：国際金融、経済成長、マクロ経済学

File

05

Hatsue SHINOHARA

篠原 初枝

専門分野：

国際関係論、国際関係史、日米関係、
外交政策（日本・東アジア・アメリカ）

外交を進め条約や国際組織ができた時の、 世界をまとめる動きに着目

GSAPSでは「国際関係論」と「外交政策」を専門として、主にアメリカと日本、アメリカと東アジア諸国の関係を研究し、教えています。世界には約200の国家があり、それらは鎖国状態でも一つの共同体でもないため、うまく共存していかなくてはなりません。その仕組みを作り上げるのが外交で、外交が進むと、やがて条約や、国際連合やEUなどの組織ができます。その組織ができた時、各国の国益の差異を少しでも緩和させ、世界全体をうまくまとめていく動きができます。私はその力に関心を持っています。

日本だけの視点にとどまらず、 アメリカの研究の必然性を感じて渡米

私が幼い頃、太平洋戦争の傷跡が東京にありました。傷痕軍人と呼ばれる、戦争で負傷した人たちが悲しそうにアコーディオンなどを弾き、お金を貰っていたのが非常に印象に残っていて、太平洋戦争に関心を抱きました。日本の大学院に進み研究していたものの、アメリカでの研究も必要だと感じ、一大決心をして渡米しました。英語ができない中でのプレゼンに対し、先生に「外国人留学生でも手加減して評価しない。鏡の前で何度も暗記しなさい」と厳しく言われたのが印象に残っています。

日本の立ち位置や世界全体のことも理解し、 自身の理解に役立てる

長い目で見れば、世界は進歩していると感じます。奴隷貿易も植民地も無くなりました。そこには世界を良くしようとした人たちがいるわけで、そのための条約や、国際組織を作った人たちや、国際組織の機能の仕方に関心を持っています。昨今のウクライナでの出来事は誰も想像できませんでした。例えば、日々何が起きているのか、経済の影響があるのかということや、中国や北朝鮮の問題などをフォローしていくと、日本の立ち位置や世界全体のことも理解でき、自分がどう考えればよいかを知るのに役立つのではと感じています。

複眼的な思考と視点、 多様な価値観を持って世界に羽ばたいてほしい

多様な背景の学生たちと切磋琢磨し、一緒に旅行をすることもあります。研究生生活で培った豊かな価値観を持ち世界に羽ばたいてほしいです。卒業生は、自国へ帰る人も多いです。GSAPSで得た知識をそれぞれの故郷で還元してもらいたい。それが私の楽しみです。今は、グローバリゼーションが進化する反面、ナショナリズムの時代とも言われています。洞察ができる、複眼的な思考と視点を持ってもらいたい。私は国際関係論の研究者として、国境を越えた連帯感やつながりの重要性をあらためて伝えていきたいと思っています。



お互いの地域の共通点と相違点を知り、 意思決定への背景を研究する

GSAPSで教鞭を執って12年程になります。専門分野は「国際関係論」です。私が扱う「比較地域主義論」では、ASEAN（東南アジア諸国連合）とEU（欧州連合）、あるいは欧州とアジアとの関係に特化して研究しています。それぞれの地域の、共通点と相違点を知りながら、政治的、経済的、社会的にどのような相関関係があるのか、さらに、社会的、宗教的、文化的なバックグラウンドがお互いの意思決定にどう影響し合っているのかに、焦点を当てています。

国際的な家庭環境で培われた、 大陸側の欧州諸国への関心

私は英国出身ですが、外交官や、政府関連の要職に就いていた家族の影響で香港に駐在していた時期もありました。そのような国際的な環境と家族構成の中で育ったことが、国際関係の研究に進むきっかけだったのかも知れません。さらに、ヨーロッパ大陸により近いところに住んでいたこともあって、EUへの関心も非常に高く、夏によくスペインで時間を過ごしたということも、大きく影響していると思います。

「現実主義のワナ」から逃れたEUの功績が、 今後の国際関係への理解を深める

国際関係に興味を持つ理由の一つが、EUへの関心です。EUは「現実主義のワナ」から逃れることができた良い事例です。ここで言う「現実主義」とは、相手国との戦争の脅威に備え、各国が軍事力を増強する現実主義を指します。EUができ、加盟国27か国は経済的、社会的にも統合され戦争が起こらない状態を生み出しました。力の均衡は、いつかどこかで破壊されてしまうからこそ、この組織を研究することが、今後の国際関係への理解を深める大きなテーマであると考えています。

多くの機会に触れ、 国際関係のプロフェッショナルを目指してほしい

GSAPSは、国際関係のプロフェッショナルを目指せる非常に多くの様々なチャンスに恵まれています。海外の仕事に就くことはもちろん、ASEANなど地域の組織に属することも考えられます。国連や、一般の民間企業におけるコンサルタントなどの選択肢も考えられます。GSAPSでは非常に高いレベルの教育を受けることができます。学生を信頼し、独自性を持って研究に臨むことを奨励しているからこそ、学生には批判的な思考が身につく、問題への柔軟な解決能力が培われるのだと思います。

File

06

Paul M.
BACON

ベーコン ポール M

専門分野：

地域間主義（ヨーロッパとアジア）、比較地域主義（ヨーロッパとアジア）、
人権の伸長と保護

国際公法が、 国際紛争をどう解決していくかに関心を持つ

主な研究は「国際公法」で、「国際海洋法」や「国際裁判」について教えています。国際公法の中でも、国際紛争を国際裁判の手続きによってどのように解決するのか、特に国際司法裁判所という伝統的な司法裁判の手続きだけでなく、国連海洋法条約第15部の紛争解決制度によって義務的な裁判が強化されていることに、興味を持っています。また、国際投資の分野では、投資家が国家を訴えることができる特別な仲裁の制度もありますので、それにも関心を持っています。

政治的な解決をする交渉の面白さと、 その冷静な手続きに惹かれる

大学生の時に初めて国際公法の授業を取りました。国際紛争の解決手段が多様であることを知り、政治的な解決に至るための交渉も一つの手法として面白いと思いました。国際裁判の手続きにおいては、国際法の規則に基づいた法的な議論による国際紛争の解決が図られることを知り、そうした手法による冷静で論理的な紛争解決プロセスにとても惹かれました。また、国際公法の規則を通じて、国際社会の様々な事象を見る新たな視点が得られると感じたことも、国際公法の研究を続けたいと思った大きな理由です。

変化の激しい国際的な紛争や事象に適応する、 国際公法の限界を知りたい

国際社会の変化が激しくても、実はその裏側にある根本的な原則はそれほど大きく変わりません。変化の激しい国際的な紛争や事象に、国際法の規則をどのように適用できるか、またそうした規則の適用にどんな限界があるかを日々考えています。勉強すればするほど知らないことが見つかり、さらに知りたいと感じることができ、国際公法は今でもとても面白い研究分野だと思っています。国際公法は様々な問題に対して、必ずしも全ての正解や完全な解決を与えてくれるツールではないことは事実です。しかし、その限界を冷静に考え、できる限りの解決方法を検討したいというのが、これからの私の研究の基本的なスタンスです。

国際関係の影響に目を向けながら、 法的な視点から貢献できる人材になってほしい

国際公法は、かつては主権国家間の関係を規律することが原則でした。今もこの原則は大きくは変わりません。しかし、国家の中にいる人の問題や、国家間の協力関係を強化する手段としての国際組織も、国際公法において大きな意味を持つようになり、そうした分野を規律する規則も多くなっています。また、主権国家の枠組を超えて、国際共同体の共通利益を守ろうとする法も生まれています。国際法を勉強する学生には、冷静に法的な視点から国際関係を見る目を持ってほしいです。国際組織で働く方や自国で政策に関わる方だけでなく、民間企業にお勤めする方でも、すべて国際関係の影響を受けています。このことを意識して、携わる仕事について考えてほしいと思います。

File 07

河野 真理子

Mariko
KAWANO

専門分野：国際法、国際海洋法

Faculty Profile

教員プロフィール



File 01 / ロバーツ グレンダ S

専門分野：社会・文化人類学、現代日本社会、外国人労働者の受け入れ対策、ジェンダーとワーク・ライフ・バランス
研究テーマ：ジェンダーの視点から見た日本社会の変化（フランスとの比較を含む）、ワーク・ライフ・バランス、
職場の変化、日本社会と移民の受け入れ

【主な経歴】

東京大学社会科学研究所客員助教授（1996-1998）/早稲田大学大学院アジア太平洋研究科助教授（1998-2001）/
同 教授（2001-現在）/イエール大学客員教員（2006-2007）/ハワイ大学客員教員（2008、2018）/EHES客員教員
（2009、2017-2018）/ハワイ東西センター非常勤シニアフェロー（2019-現在）
法務省出入国管理政策懇談会委員、米国人類学会東アジア人類学協会会長ほか歴任



File 02 / 早瀬 晋三

専門分野：アジア民族史・社会史、国際関係史
研究テーマ：海域東南アジア民族史、近現代アジア・日本関係史

【主な経歴】

鹿児島大学教養部講師・助教授（1987-1993）/大阪市立大学文学部助教授（1993-2001）/大阪市立大学大学院
文学研究科教授（2001-2013）/早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授（2013-現在）
東南アジア史学会・東南アジア学会編集委員、フィリピン歴史学会『The Journal of History』国際諮問委員ほか歴任



File 03 / 加藤 篤史

専門分野：経済発展論、産業発展論、インド経済
研究テーマ：経済発展の政治経済学、インドの経済発展

【主な経歴】

大東文化大学経済学部専任講師（1996-1999）/青山学院大学経営学部助教授・准教授（1999-2010）/
青山学院大学経営学部教授（2010-2016）/早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授（2016-現在）



File 04 / 菊地 朋生

専門分野：国際金融、経済成長、マクロ経済学
研究テーマ：国際資本移動と経済成長、金融市場と経済発展、グローバル経済における日本

【主な経歴】

シンガポール国立大学経済学部助教授（2007-2014）/シンガポール国立大学リークワンユー公共政策大学院シニア
リサーチフェロー（2014-2017）/南洋理工大学Sラジャラトナム国際学大学院客員シニアフェロー（2018-2019）/
高麗大学経済学部准教授・教授（2019-2021）/早稲田大学大学院アジア太平洋研究科准教授（2021-現在）
『Journal of Asian Economics』・『Malaysian Journal of Economics』編集委員ほか歴任

Faculty Profile 教員プロフィール



File 05 篠原 初枝

専門分野：国際関係論、国際関係史、日米関係、外交政策（日本・東アジア・アメリカ）
研究テーマ：国際組織、国際法（規範）と国際政治、文化外交

【主な経歴】

恵泉女学園大学人文学部助教授（1993-1998）/上智大学非常勤講師（1995-1997）/明治学院大学国際学部
国際学科助教授（1998-2003）/早稲田大学大学院アジア太平洋研究科助教授（2003-2004）/同 教授（2004-現在）/
東京大学非常勤講師（2005-2009）/ジョージワシントン大学エリオットスクール客員研究員（2009）/
ヴェニス国際大学交換教授（2016）
Carnegie Global Ethics Fellow、アジア歴史資料センター諮問委員ほか歴任



File 06 ベーコン ポール M

専門分野：地域間主義（ヨーロッパとアジア）、比較地域主義（ヨーロッパとアジア）、人権の伸長と保護
研究テーマ：安全保障化、ノルムローカライゼーション、ヨーロッパとアジアの地域組織、EUと日本の関係、
国際秩序に係るイギリスの欧州連合離脱の影響、アジア太平洋地域におけるEUの人権戦略、
アジア太平洋地域における刑事司法の比較

【主な経歴】

秀明大学客員教授（1999-2002）/東京女学館大学助教授（2002-2005）/東京大学客員研究員（2003-2005）/
早稲田大学国際教養学部助教授・准教授（2005-2016）/同 教授（2016-現在）/同大 大学院アジア太平洋研究科
准教授・教授（兼任）（2010-現在）/同大 大学院国際コミュニケーション研究科准教授・教授（兼任）（2013-現在）



File 07 河野 真理子

専門分野：国際法、国際海洋法
研究テーマ：紛争の平和的解決、国家責任

【主な経歴】

筑波大学社会科学系専任講師・助教授（1990-2004）/早稲田大学法学学術院教授（2004-現在）/
同大 大学院アジア太平洋研究科教授（兼任）（2007-現在）
総合海洋政策本部参与、国土交通省交通政策審議会海事分科会長、財務省関税・外国為替等審議会委員ほか歴任

